

圧が強い、店員のギューキモンの話。

語尾はまあいいとして単純にデカイ上に牛頭の上半身と蜘蛛の下半身で癖が強い。

巨体を支える六本脚には鋭い爪も生え、歩く度に地を揺らすかと思えば歩きは無音。

角の先に付いた鈴の澄んだ音、見た目に似合わないそれだけがギューキモンの接近を告げる。

これが何体も店員として歩き回ってるんだから、店自体の現実離れた雰囲気もあってホラーの世界。

前にこの群れと遭遇してる俺とフレイモンはともかく初見にはキツくないかと心配なんだけど。

「目隠しとか包帯ってカッコいいねー、ボクにも似合うかなー」

「お前の体型だとただグルグル巻きになるだけじゃねえか...？」

「カッコいい...かな？」

エースケくとコドクグモンは平気らしい、カッコいいの範囲が広がったのと単に気後れしないタイプ。

灰も平気そうなのはちょっと意外、ゴツいのは苦手かと思ったんだけど。

「最初はびっくりしたけど...よく見たら大きいクモだったから」

それはもう見慣れてると横のコドクグモンに目を向けた。

サイズはかなり差があるけど確かにどっちも大きい蜘蛛、見慣れた要素が大きい分怖くはないらしい。

「言われてみりゃクモ同士だな俺とあいつら」

「色も似てるしアレに進化するの？」

「地元じゃそんな話聞いたことねえけどそういうルートもあっかもなあ、強く進化出来るならなんでもいいわ俺は」

「進化いーなー、ボクも早く進化してアローとシャドウに追加戦士したい」

「オイラもそんな時期あったなあ...」

進化と強さを望むのはデジモンの本能らしい、人間の常識で恐ろしいとされる姿もデジモンにとっては自分が辿り着く形の一つでしかない。

俺と行くところまで行っちゃってるフレイモン以外はあれもいいなこれもいいなとまだ見ぬ自分の進化に思いを馳せている、テイマーの方はどうなんだろう。

「灰は何か希望ある？コドクグモンの進化先」

「え...考えた事なかったけど...うん、どうせなら温かいデジモンがいいかな？冬嫌いだし」

だってさ、頑張れコドクグモン。

「いや～、クモから火炎系は厳しくね？」